

県営新生産調整推進排水対策特別事業諏訪川  
地区に伴う埋蔵文化財発掘調査概要

富山市針原中町Ⅱ遺跡  
発掘調査概要

2000年3月

富山市教育委員会

県営新生産調整推進排水対策特別事業諏訪川  
地区に伴う埋蔵文化財発掘調査概要

# 富山市針原中町Ⅱ遺跡 発掘調査概要

2000年3月

富山市教育委員会

# 例 言

1. 本書は、県営新生産調整推進排水対策特別事業諏訪川地区に伴う、富山市針原中町Ⅱ遺跡の発掘調査概要である。
2. 調査は、富山県富山農地林務事務所の依頼を受けて富山市教育委員会が実施した。
3. 調査の期間、発掘面積等は次のとおりである。  
現地発掘調査 平成10年7月6日～平成10年9月22日 約 1,900m<sup>2</sup>  
出土品整理 平成11年10月15日～平成12年3月24日
4. 調査の実施にあたっては、富山県教育委員会文化財課、富山県埋蔵文化財センターの指導と助言を受けた。
5. 現地調査及び本書の編集・執筆は、富山市教育委員会学芸員小林高範が担当した。
6. 調査および報告書作成まで次の各氏から有益な助言と協力を頂いた。記して謝意を表したい。  
島田忠夫・高井芳春・橋本正春・堀内龍夫・宮田進一（敬称略）
7. 本書の挿図・写真図版の表示は次のとおりである。
  - (1) 方位は真北、水平基準は海拔高である。
  - (2) 遺構の表記は次の記号を用いた。  
SD：溝、SK：土坑、P：柱穴状ピット、SE：井戸
  - (3) 挿図の遺物縮尺は1/2・1/3を原則とした。写真図版の遺物縮尺は1/2・1/3を原則とした。
8. 出土品及び原図・写真類は、富山市教育委員会が保管している。

# 目 次

I 遺跡の位置と環境 .....	1
II 調査にいたる経緯 .....	3
III 調査の概要 .....	4
(1) 調査の経過と層序 .....	4
(2) 遺構 .....	7
(3) 遺物 .....	12
IV まとめ .....	15

# I 遺跡の位置と環境

針原中町Ⅱ遺跡は、富山市中心部から北東約8kmの針原中町地内に所在する。

遺跡は、常願寺川左岸の複合扇状地末端部、標高7mのところ立地し、海岸線までは約3kmの位置にある。

遺跡周辺は水田耕作地帯で、ほ場整備事業などによって現在は平坦な地形や区画を呈している。しかし、地図に残された水田の形状や微地形を細かく観察すると、旧河川の跡が確認できる。第2図の野田・平履遺跡の西側が湾曲しているのが顕著な例であるが、河川が周辺で発達し、中洲状の微高地が形成されたと思われる。そのような微高地に遺跡は点在している。

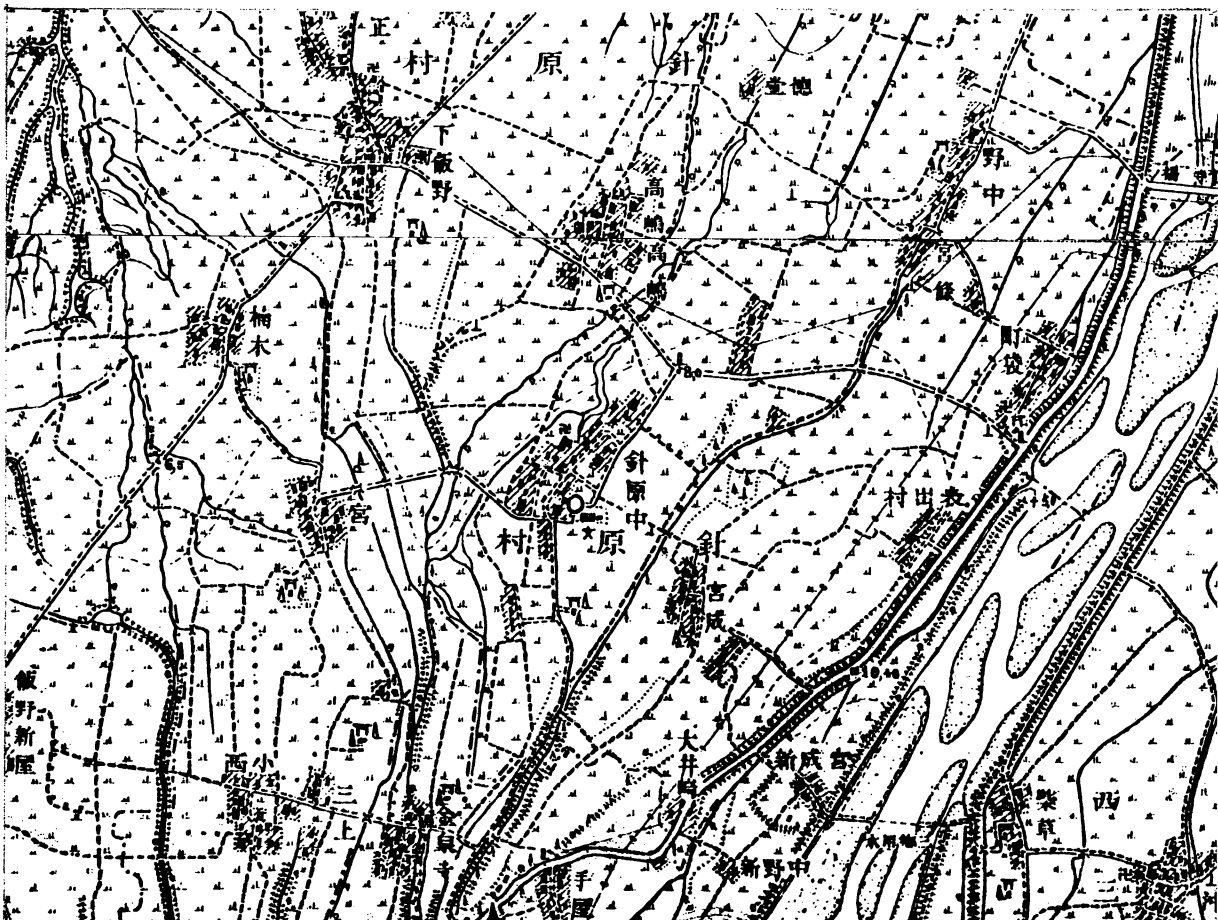
周辺の遺跡の分布状況（第2図）をみると、およそ3つのブロックにまとめられる。

1つは、浜黒崎町畑遺跡、高来遺跡など海岸べりの遺跡で、遺跡の年代は古代（奈良～平安）、中世を中心とした遺跡が多い。

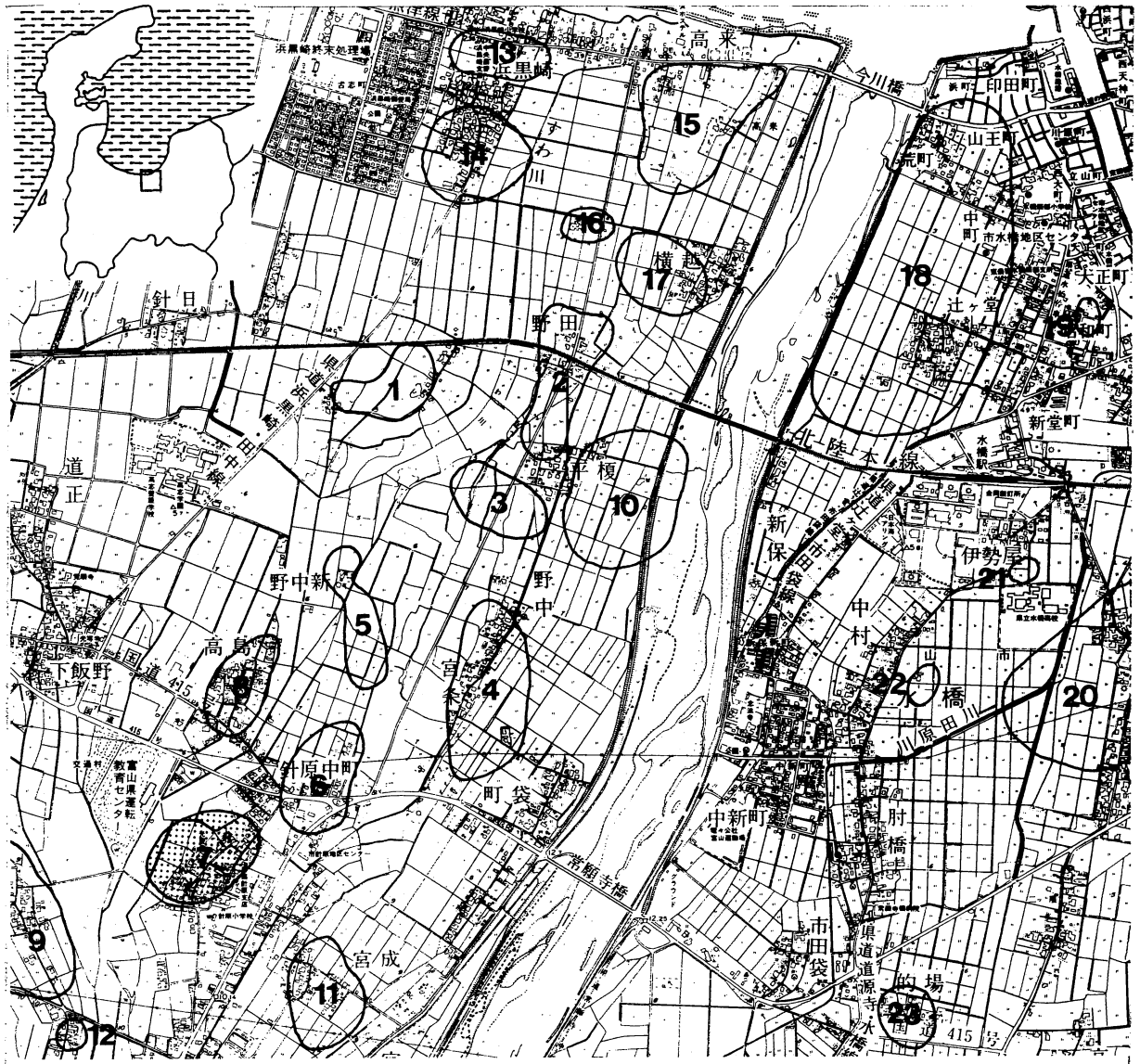
2つめは、海岸からやや内陸部の遺跡で、浜黒崎悪地遺跡、宮条南遺跡、水橋荒町遺跡を囲む範囲に相当する。この範囲内では、いずれも縄文時代後～晩期、あるいは弥生時代に形成が始まり、古代に最も発達しながら中世、あるいは近世まで継続している。

3つめは、宮町遺跡、宮成遺跡、水橋池田館遺跡など2つめのブロックより南に位置する遺跡で、古代、中世を主体に営まれている。

このような分布状況から、海岸に近い微高地に形成された集落を中心とし、古代には海岸部と内陸部へ展開していった様相が窺われる。



第1図 明治43年 陸地測量 測量図 (1:20,000) より 富山・東岩瀬



No.	遺跡名	年代(時代)							種別	No.	遺跡名	年代(時代)							種別
		縄文	弥生	古墳	奈良	平安	中世	近世				縄文	弥生	古墳	奈良	平安	中世	近世	
1	浜黒崎悪地遺跡	●晩	●中	●前	●	●	●	集落跡	13	浜黒崎町畑遺跡			●	●			散布地		
2	野田・平榎遺跡	●前・中~晩	●	●前	●	●	●	集落跡	14	浜黒崎飯田遺跡			●	●	●	●	散布地		
3	野中新長幅遺跡	●後	●	●前	●	●	●	集落跡	15	高来遺跡			●	●			散布地		
4	宮条南遺跡	●後・晩	●中	●前	●	●	●	集落跡	16	野田Ⅱ遺跡	●後・晩	●	●前				散布地		
5	高島島浦遺跡	●晩	●	●前	●	●	●	集落跡	17	横越遺跡				●	●	●	●	散布地	
6	針原中町Ⅰ遺跡	●後	●中	●	●	●	●	集落跡	18	水橋荒町遺跡	●中・後・晩	●	●	●	●	●	●	集落跡 官衙跡	
7	針原中町Ⅱ遺跡		●	●前	●	●	●	集落跡	19	水橋畠等遺跡		●	●				●	散布地	
8	高島遺跡	●後・晩	●	●	●	●		散布地	20	水橋池田館遺跡			●	●	●	●	散布地		
9	宮町遺跡	●	●後	●前	●	●	●	集落跡	21	水橋伊勢屋B遺跡						●	散布地		
10	平榎亀田遺跡			●前	●	●		散布地	22	水橋中村遺跡				●	●		散布地		
11	宮成遺跡				●	●	●	散布地	23	水橋の場遺跡				●	●	●	散布地		
12	三上遺跡		●後		●	●	●	散布地											

第2図 周辺の遺跡分布図(1:25,000)

## II 調査にいたる経緯

平成3年に、富山市浜黒崎から針原方面にかけての約123haの水田を対象として、県営低コスト化水田農業大区画ほ場整備事業（針原北部地区）の計画が策定された。また、同じ地区内で灌漑用水として利用している諏訪川の改修工事である県営新生産調整推進排水対策特別事業諏訪川地区も合わせて策定されることとなった。

まず、ほ場整備事業地内には7遺跡（浜黒崎悪地遺跡、野田・平榎遺跡、野中新長幅遺跡、宮条南遺跡、高島島浦遺跡、針原中町Ⅰ遺跡、針原中町Ⅱ遺跡）の所在があり、面積が広いことから富山県埋蔵文化財センター・富山市教育委員会・富山県富山農地林務事務所など関係機関で協議を重ね、富山市教育委員会が平成4年度から遺跡の試掘調査、発掘調査を進めることとなった。なお、協議によって試掘調査で確認された遺跡範囲のうち、田面工事部分については計画高の調整をして遺跡を保護し、道路・用水・排水路工事にかかる部分は事前の発掘調査を行うこととした。調査は平成4年度から平成9年度まで継続して実施した（第1表）。

一方、排水対策特別事業には当初、浜黒崎悪地遺跡、高島島浦遺跡、針原中町Ⅱ遺跡の3遺跡の所在があったが、平成6年度の浜黒崎悪地遺跡、平成7年度の高島島浦遺跡の試掘調査では、いずれも遺跡は確認されなかった。唯一、平成8年度に試掘調査を行った針原中町Ⅱ遺跡のみ改修工事にかかることが明らかとなった。

このため、富山農地林務事務所と再度協議を行い、遺跡のない部分から諏訪川改修工事を進めるとともに、ほ場整備事業にかかる発掘調査を平成9年度まで優先させて行い、排水対策特別事業にかかる針原中町Ⅱ遺跡の発掘調査は平成10年度に行うこととなった。

遺跡名	調査概要	時代	検出遺構	主な出土遺物
はまくろさきあくち 浜黒崎悪地	1992年試掘・発掘(90m <sup>2</sup> ) 1993年試掘・発掘(4,600m <sup>2</sup> ) 1994年試掘・発掘(4,550m <sup>2</sup> )	縄文(晩)・弥生(中)・ 古墳(前)・平安・中世・ 近世	掘立柱建物 溝・土坑・ 井戸など	縄文土器・石器・弥生土器・土師器・須恵器・土錘・珠洲焼・中世土師器・青磁・近世陶磁器
のだ・ひらえのき 野田・平榎	1994年試掘 1995年発掘(2,000m <sup>2</sup> )	縄文(前・中～晩)・ 弥生・古墳(前)・奈良・ 平安・中世・近世	土器捨て場 溝・穴など	縄文土器・石器・土製品・弥生土器・土師器・須恵器・土錘・珠洲焼・近世陶磁器
のなかしんながはば 野中新長幅	1994年試掘・発掘(250m <sup>2</sup> ) 1995年試掘・発掘(3,200m <sup>2</sup> )	縄文(後)・弥生・古墳 (前)・奈良・平安・中世・ 近世	掘立柱建物 溝・土坑・ 井戸など	縄文土器・弥生土器・土師器・須恵器・珠洲焼・中世土師器・近世陶磁器
みやじょうみなみ 宮条南	1995年試掘 1996年発掘(5,400m <sup>2</sup> )	縄文(後～晩)・弥生 (中)・古墳(前)・平安・ 中世・近世	溝・井戸・ 墓跡など	縄文土器・弥生土器・土師器・須恵器・珠洲焼・中世土師器・近世陶磁器
たましましもうら 高島島浦	1995年試掘 1996年試掘 1997年発掘(2,200m <sup>2</sup> )	縄文(晩)・弥生・古墳 (前)・奈良・平安・中世・ 近世	土器捨て場 掘立柱建物 井戸・溝	縄文土器・石器・弥生土器・土師器・須恵器・土錘・珠洲焼・中世土師器・近世陶磁器
ほりわらなかまちいち 針原中町Ⅰ	1996年試掘 1997年発掘(1,800m <sup>2</sup> )	縄文(後)・弥生(中)・ 古墳・奈良・平安・中世・ 近世	竪穴状遺構 掘立柱建物 溝・土坑	縄文土器・石器・弥生土器・土師器・須恵器・土錘・中世土師器・青磁・近世陶磁器
ほりわらなかまちに 針原中町Ⅱ	1996年試掘 1997年発掘(1,100m <sup>2</sup> )	弥生・古墳(前)・奈良・ 平安・中世・近世	井戸・溝・ 土坑など	土師器・須恵器・土錘・珠洲焼・中世土師器・砥石

第1表 ほ場整備事業地内の遺跡調査概要

### Ⅲ 調査の概要

#### (1) 調査の経過と層序

##### 調査の経過と調査方法

平成8年度のは場整備事業に伴う試掘調査により、遺跡の西側では、第3図に示した範囲で遺跡の所在を確認した。東半の集落側については推定範囲である。

このうち、排水対策特別事業の工事にかかる範囲（網かけ部分）については、遺跡の保護措置が必要であり、平成10年度に発掘調査を実施した。

発掘調査は、平成10年7月6日から9月22日まで行った。調査対象面積は約1,900㎡である。

作業は、重機により遺物包含層の上面まで表土を排出したのち、作業員を用いて遺物包含層を掘り下げ、遺構の確認と包含層中の遺物取り上げを行った。遺構は概略図をもとに番号をふり、土層断面図や遺物の出土平面図をとりながら掘り下げた。遺構の平面測量には、光波測量機械トータルステーションを使用し、航空写真測量を行って全体測量図を作成した。

調査の基準杭は、9年度のは場整備事業の発掘調査で用いた座標をもとに設定して使用した。座標値は公共座標ではなく任意のものであり、南北方向のY軸は真北とほぼ一致する。また水平基準は付近のBM点から測定した。

##### 層序

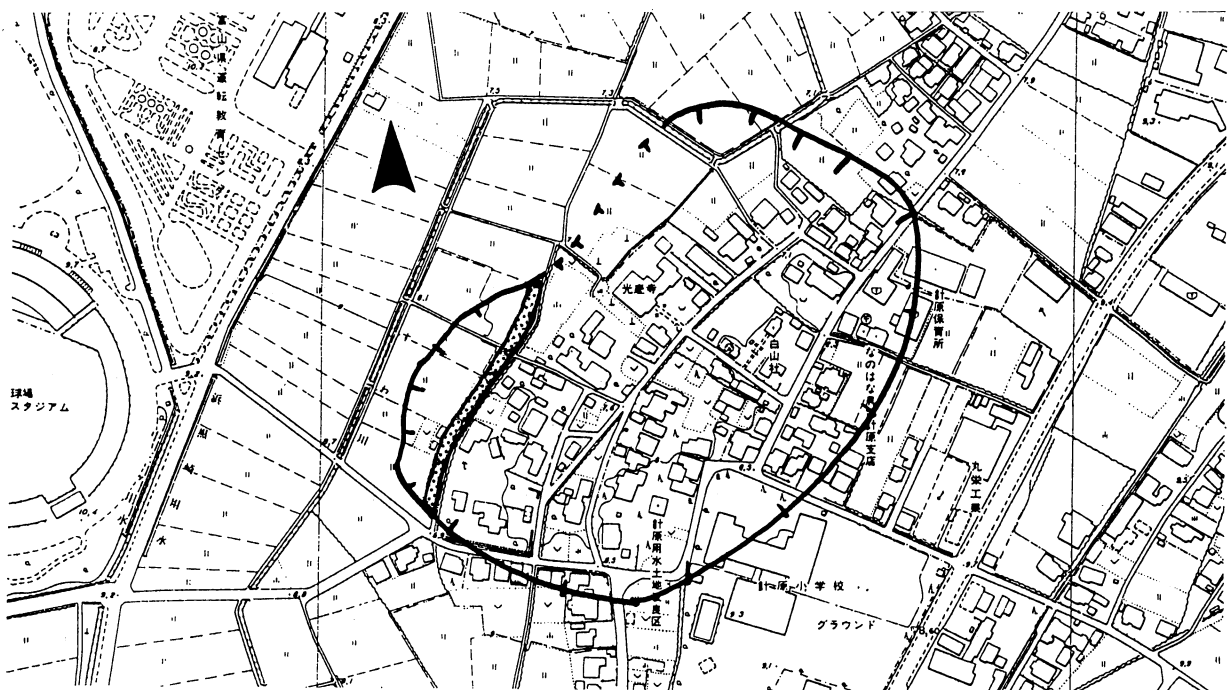
調査区の基本層序は、表土層を第1層として5層まで確認している（写真図版7-1）。

第1層：厚さ20cmほどの灰褐色砂質土で、現在の耕作土である。

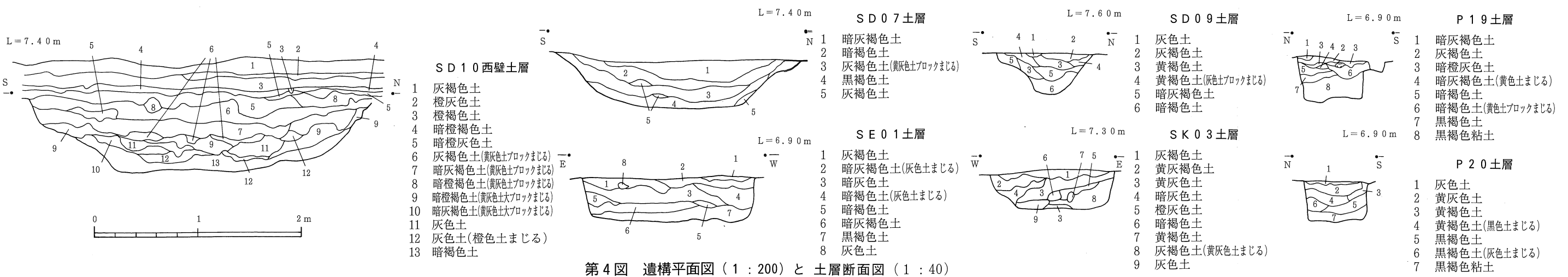
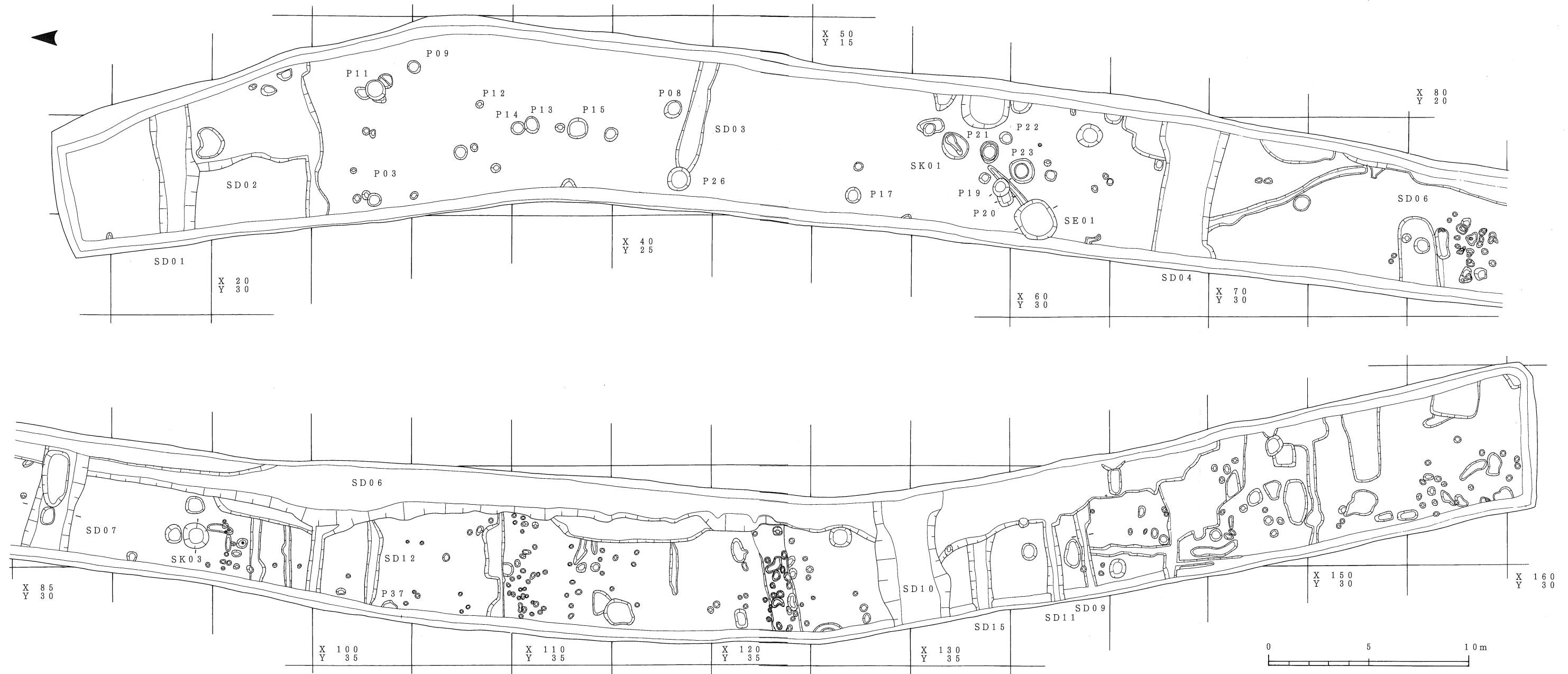
第2層：厚さ20cmほどの橙灰色砂質土であり、旧耕作土土と思われる。

第3層：厚さ10～15cmの暗灰褐色砂質土、第4層：厚さ15cmほどの暗褐色砂質土で、いずれも遺物包含層である。

第5層：灰色～黄灰色シルトの地山である。途中で青灰色シルトが縞状に混じり、北端では湧水がみられた。



第3図 発掘調査区域（1：5,000）



第4図 遺構平面図(1:200)と土層断面図(1:40)



## (2) 遺構

調査区の北半部を中心に溝、井戸、土坑、ピットを検出した（第4図～第7図）。また、南側では人家に近く、かなり攪乱をうけている状態であった。

SD01（第5図）調査区の北端で検出した幅1.8m、深さ40cmほどの溝である。東西方向にのびており、断面形は浅い台形状を呈する。SD02の北端を切っているが、それほど時期差はみられない。中世土師器の小皿、珠洲焼の甕や片口鉢、越中瀬戸の丸皿の破片が出土しており、14世紀後半～15世紀後半の時期と思われる。

SD02（第4図、第5図）SD01の南側に位置する。幅4m、深さ1m前後の溝で、東側にのびている。北側はSD01によりわずかに切られており、中世土師器の小皿、珠洲焼の甕の破片、越中瀬戸が出土した。15世紀後半～17世紀前半の時期と思われる。

SD03（第4図、第7図）幅1.2m、深さ30cmほどの溝で、断面は緩やかな皿状を呈している。東側にのびており、西端はP26に切られている。西端で中世土師器の小皿や焼けた礫がまとまって出土しており、時期は15世紀前半ごろと思われる。

SD04（第4図）調査区の中央からやや北側で検出した幅3m、深1.5mほどの溝で、東西方向にのびている。断面形は深い台形状を呈し、底部には黒褐色粘土が20cmほど堆積している。中から中世土師器の小皿の破片、越中瀬戸の丸皿、板状木製品が出土し、時期は16世紀後半～17世紀前半と思われる。

SD06（第4図、第6図）調査区の東壁に沿うような形で検出した。南北方向にのびており、北側ではやや幅が狭くなり、南側では攪乱をうけている。溝の東肩は調査区外に広がっており、全貌は明らかでないが、幅3～4m、深さ1m前後と推測される。ほかの溝に比べると幅が広く深いため、あるいは集落内を区画する溝なのかもしれない。中から古式土師器の甕、須恵器と珠洲焼の甕の胴部片、中世土師器、越中瀬戸、瀬戸美濃の鉢、木製品などが出土した。時期的には14世紀前半～17世紀前半まで継続していると思われる。

SD07（第4図）調査区の中央で検出した幅2m、深さ60cmほどの溝で、東西方向にのびる。東端でやや深くなっており、SD06を切っている。中世土師器の小皿、珠洲焼の片口鉢の破片などが出土しており、時期は15世紀後半ごろと思われる。

SD09（第4図）調査区の南側で検出した幅1m、深さ40cmほどの溝である。西側に向かっているのびており、東側はSD06により切られている。越中瀬戸の丸皿の破片が出土しており、時期は17世紀前半と思われる。

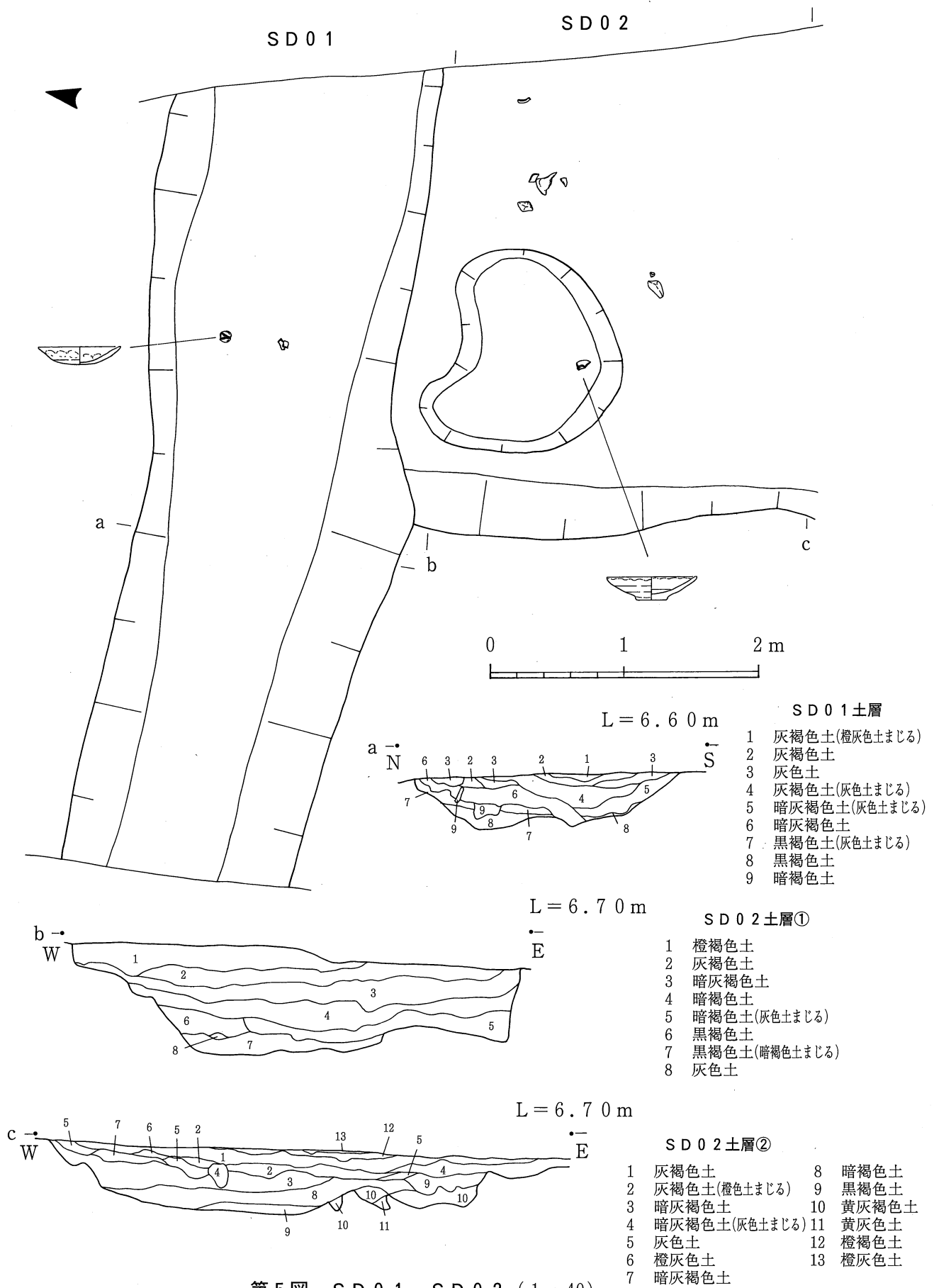
SD10（第4図）調査区南側で検出した幅3m、深さ1mほどの溝で、東西方向にのびている。断面は台形状を呈しており、東側でSD06を切っている。中から珠洲焼の片口鉢、越中瀬戸の丸皿の破片、瀬戸美濃の瓶が出土している。時期は15世紀後半～17世紀前半と思われる。

SD11（第4図）調査区南側で検出した幅1m、深さ50cmほどの溝で、西側にのびている。東側は攪乱をうけており、SD06との切り合いは不明である。西端で越中瀬戸の播鉢が出土している。時期は17世紀前半と思われる。

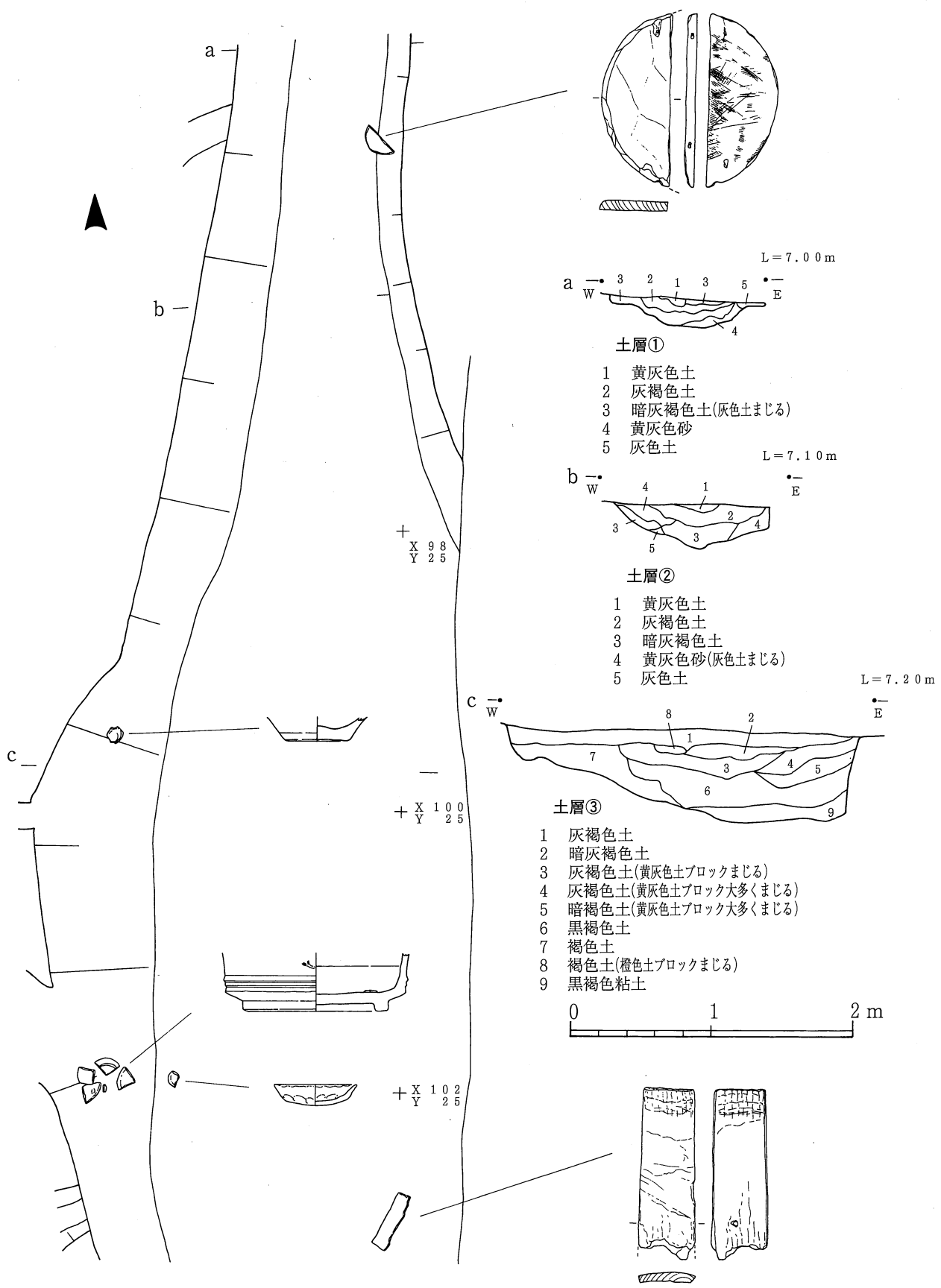
SE01（第4図）調査区の中央から北よりで検出した。平面は径2mの隅丸形状で、断面は台形状を呈し、底部には黒褐色土が堆積していた。中から中世土師器の小皿の破片、越中瀬戸の筒型碗が出土した。16世紀後半～17世紀前半ごろと思われる。

SK03（第4図）調査区の中央から南よりで検出した。径1m、深さ40cmの皿状の土坑で、中世土師器の小皿の破片が出土しており、15世紀後半ぐらいの時期と思われる。

P03（第8図）調査区の北西側で検出した。径60cm、深さ40cmほどの土坑で、底部に黒褐色粘土が堆積している。暗褐色土層中から中世土師器の完形の小皿が出土しており、時期は15世紀前半と考えられる。



第5図 SD 0 1・SD 0 2 (1 : 40)



第6図 SD06 (1:40)

P 1 0 (第 8 図) 調査区の北東側に位置し、P 1 1 により切られている。深さは25cmほどで、中世土師器の小皿が出土した。15世紀後半ぐらいと思われる。

P 1 1 (第 8 図) 調査区の北東側で検出した。径1m、深さ30cmの土坑で、断面形は皿状を呈している。珠洲焼の甕の破片とともに焼けた礫が出土した。P 1 0 を切っており、時期は15世紀後半以降と思われる。

P 1 2 (第 4 図) 調査区の北東側で検出した。径35cm、深さ45cmの土坑で、底部に黒褐色粘土が堆積していた。中から大定通寶が1枚出土した。

P 1 4 (第 4 図) 調査区の北東側で検出した。径60cm、深さ40cmの土坑で、暗褐色土が堆積しており、至大通寶が1枚出土した。

P 1 7 (第 4 図) 調査区の北西側で検出した。径70cm、深さ40cmの土坑で、底部に黒褐色粘土が堆積していた。中から青磁の碗の底部が出土した。

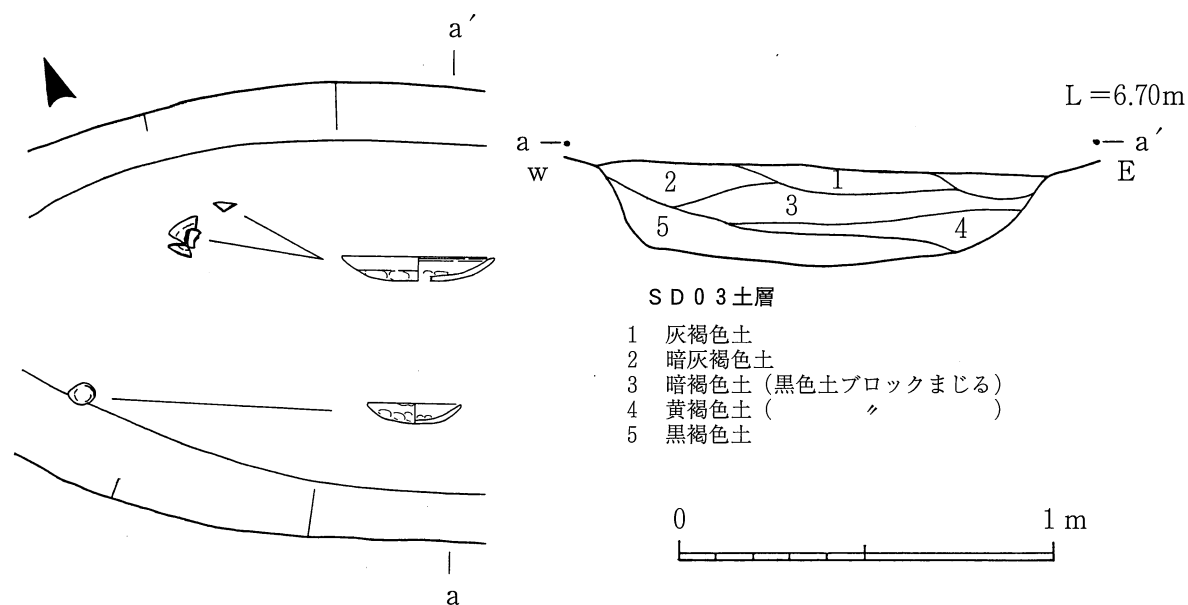
P 1 9 (第 4 図) S E 0 1 の北側で検出した。径70cm、深さ45cmの土坑で、P 2 0 を切っている。越中瀬戸の皿の破片が出土しており、時期は17世紀前半と思われる。

P 2 0 (第 4 図) S E 0 1 の北側で検出した。深さ40cmの土坑で、P 1 9 により切られている。もとは径60cmほどの大きさと思われ、中から永楽通寶が1枚出土した。

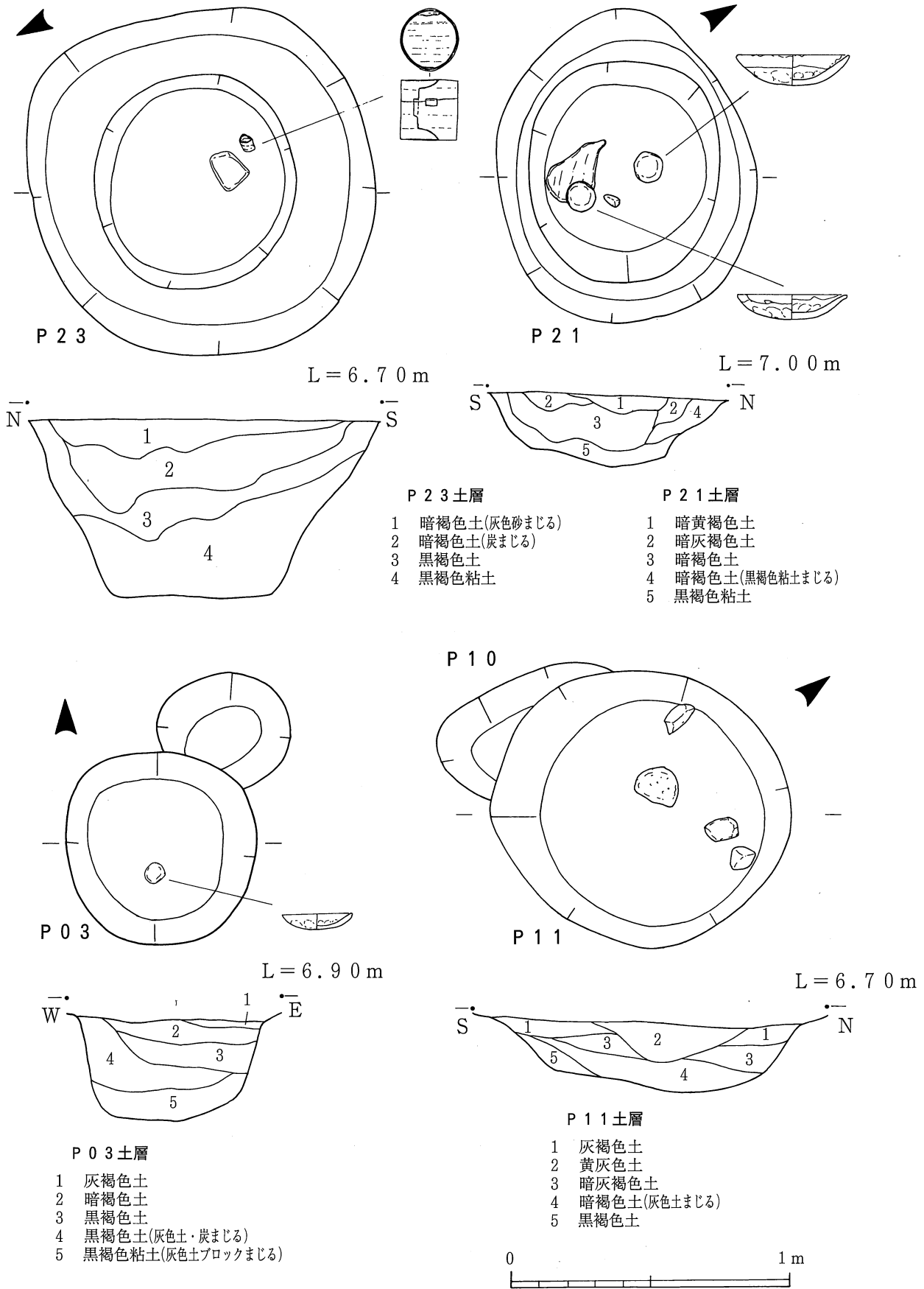
P 2 1 (第 8 図) P 1 9 の西側に位置し、平面は楕円形状、深さ30cmの土坑である。中世土師器の完形の皿が2点出土した。時期は15世紀後半と思われる。

P 2 3 (第 8 図) P 2 1 の南側に位置している。径50cm、深さ65cmの土坑で、断面形は台形状を呈している。下半部から黒褐色粘土が堆積しており、中から柄杓が出土した。柄はついてなかったが、付近に井戸跡である S E 0 1 があり、井戸に使われたものが廃棄されたのではないかと推測される。また聖宋元寶が1枚出土している。16世紀後半ごろの時期と思われる。

P 3 7 (第 4 図) S D 1 2 の南側で半分のみ検出した。径80cm、深さ45cmの土坑で、黒褐色粘土が堆積していた。越中瀬戸の筒形碗、犬と僧侶を形取った土製品が出土した。17世紀前半に位置付けられる。



第 7 図 S D 0 3 ( 1 : 20 )



第 8 図 P 0 3 ・ P 1 1 ・ P 2 1 ・ P 2 3 ( 1 : 20 )

### (3) 遺物

遺構の遺物（第9図・第10図） 遺構からは、主に中世～近世の遺物が出土している。

SD01（16～19）16、17は口径9cmの非ロクロ成形の中世土師器の小皿である。16は口縁がやや外反気味に立ち上がり、外面に油煙痕がわずかにみられる。18は珠洲焼の甕で、口縁はくの字状に外反し、胎土には海綿骨針が含まれる。珠洲Ⅱ期に位置付けられる。19は珠洲焼の片口鉢で、20条の幅広で粗い卸し目が密に刻まれる。胎土には海綿骨針が含まれる。珠洲Ⅳ期に相当する。

SD02（20）口径10cmの越中瀬戸の丸皿である。回転糸切り底で、内面と外面上半に鉄釉がかかる。また、口縁端部には内外面に炭化物が付着している。

SD03（21、22）21、22は非ロクロ成形の中世土師器の小皿である。21は器壁が薄く、口縁は外反している。22は完形品で、口縁は斜めにつまみ上げている。油煙痕がわずかにみられる。

SD04（23、29）23は口径10.8cmの越中瀬戸の丸皿である。内面上半と外面に鉄釉がかかり、高台は削り出している。29は厚さ5mmほどの板状木製品で、上端に径2mmの小孔があげられている。内外面に線状痕が多く観察され、組板として転用されたと考えられる。

SD06（24～26、30～33）24は古式土師器の甕の底部である。胎土は粗く、遺存状態はあまり良くない。25は口径8.8cmの非ロクロ成形の中世土師器の皿で、口縁は外反気味である。端部に油煙痕がわずかにみられる。26は越中瀬戸の丸皿の底部で、高台は削り出している。30は瀬戸美濃の鉢である。底径20.4cmの大きなもので、内面には6か所のトチン跡が残る。16世紀後半～17世紀前半のものと思われる。31は径24cmの曲物の底板の一部で、綴り皮が一部残っている。32は桶か樽の側板で、厚さは1.3cmを測る。横方向の削り痕が内外面上半に観察される。33は径28cmの曲物の底板で、両端部と側面に孔があげられている。外面に線状痕が多数観察され、組板として転用されたと考えられる。

SD10（27）底径7.4cmの瀬戸美濃の瓶である。内外面に灰釉がかかり、回転糸切り底である。

SD11（28）口径28.6cmの越中瀬戸の播鉢である。口縁の縁帯は短く折れ、12条の卸し目が刻まれる。錆釉がかけられているが、遺存状態はあまり良くない。

SE01（8）口径10.8cmの越中瀬戸の筒形碗の口縁部分で、内外面に鉄釉がかかる。

P03（1、2）いずれも非ロクロ成形による中世土師器の小皿である。1は口径7.4cmの完形品で、口縁は上方につまみあげている。2の口縁は斜めに立ち上がる。

P10（3）非ロクロ成形による中世土師器の小皿で、口縁は外反している。

P12（11）大定通寶（金、初鑄1178年）の無背のものである。

P14（12）至大通寶（元、初鑄1310年）である。表面は劣化している。

P17（4）底径5.6cmの青磁の碗の底部である。内底部は無文である。

P20（13）永楽通寶（明、初鑄1408年）である。大きさと書体から輸入銭であると思われる。

P21（5、6）非ロクロ成形による中世土師器の皿で、いずれも口縁端部の内外面に炭化物が残っている。5は口径11.8cm、高さ3.4cmのもので、口縁はやや斜めに立ち上がる。6は口径11.4cm、高さ2.8cmの完形品で、口縁は外反気味である。

P23（14、15）14は聖宋元寶（北宋、初鑄1101年）の折二銭で、表面は劣化してかなりぼろぼろである。15は柄杓である。綴り皮がなく、取り上げ後に割裂したため、図は推定である。高さ6.4cmで、柄を差し込む方形孔がみられる。

P37（7、9、10）7は口径11cmの越中瀬戸の筒形碗で、内外面に鉄釉がかかる。9、10は土製品で、焼成は良好である。9は犬の頭部で、目など細部は不明瞭である。内面に指頭の痕が残る。10は僧侶であろうか。表裏を別に作って合わせたもので、側面や底面に接合痕がみられる。

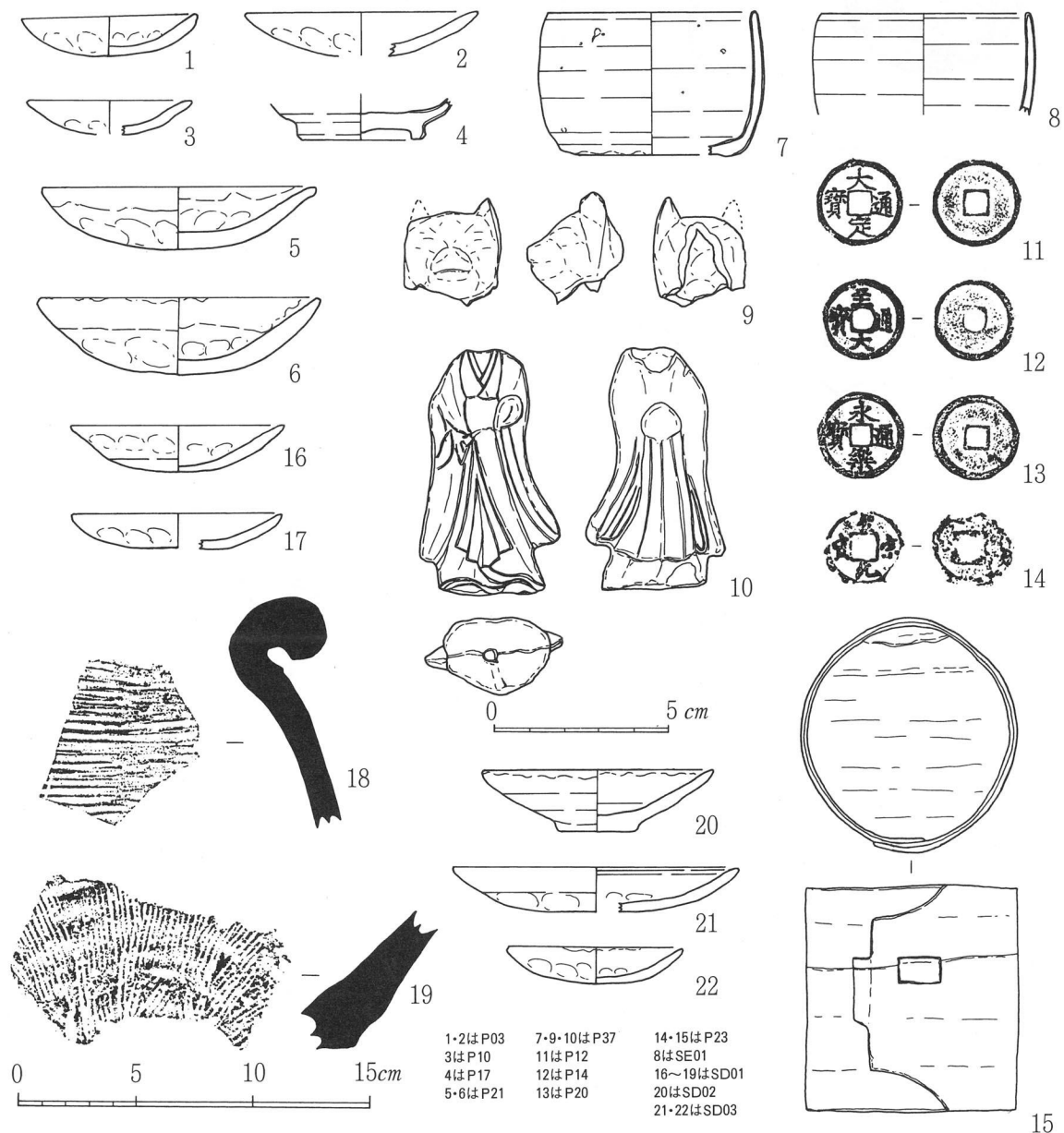
包含層中の遺物（第11図） 古式土師器、須恵器、土師器、土錘、珠洲焼、中世土師器、砥石、越中瀬戸などが出土した。細かな破片が多く、出土量は2箱と多くはない。主なものを図示した。

古式土師器（1）口径29.4cmの複合口縁甕である。外傾して立ち上がる口縁帯の中央に擬凹線を施している。古墳時代前期初頭に位置付けられる。

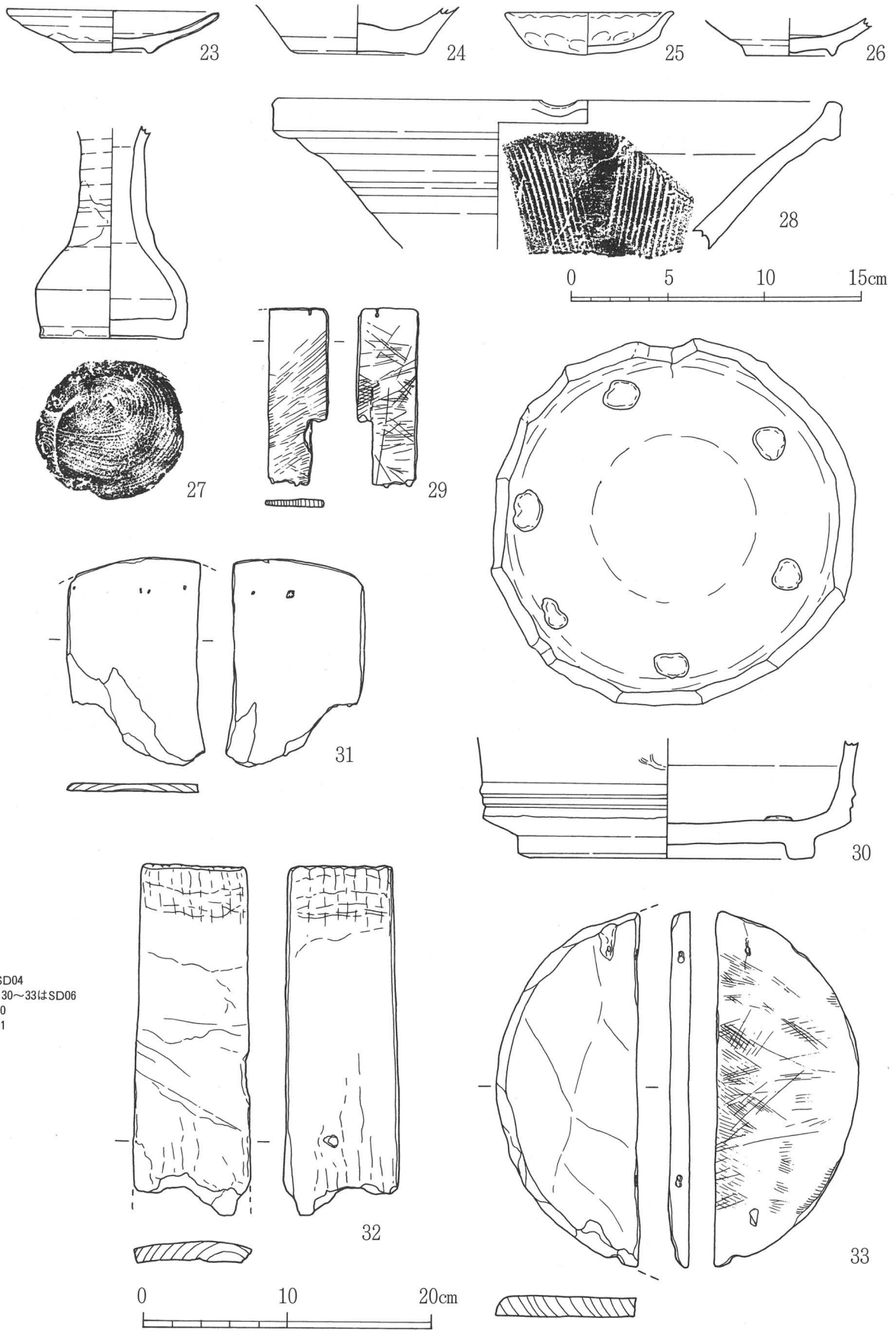
土錘（2）卵形をした土錘で、ずんぐりして重量がある。外面には指頭圧痕、内面には棒状具の抜き取り痕がみられる。

中世土師器（3～9）非ロクロ成形による中世土師器の小皿で、口縁の形態等により5つに細分できる。3、4は器壁が薄く、口縁は斜めに立ち上がる。5は口縁端部が細くのびる。6は口縁が外反している。7は口縁を上方につまみあげている。8、9は器壁が厚く、口縁は外反気味である。4、7には油煙痕が残っている。

珠洲焼（10～12）いずれも甕の破片で、胎土には海綿骨針が含まれる。10は口縁端部を欠いているが、珠洲IV期になるものと思われる。12は口径42cmの甕の口縁部で、珠洲V期に相当する。



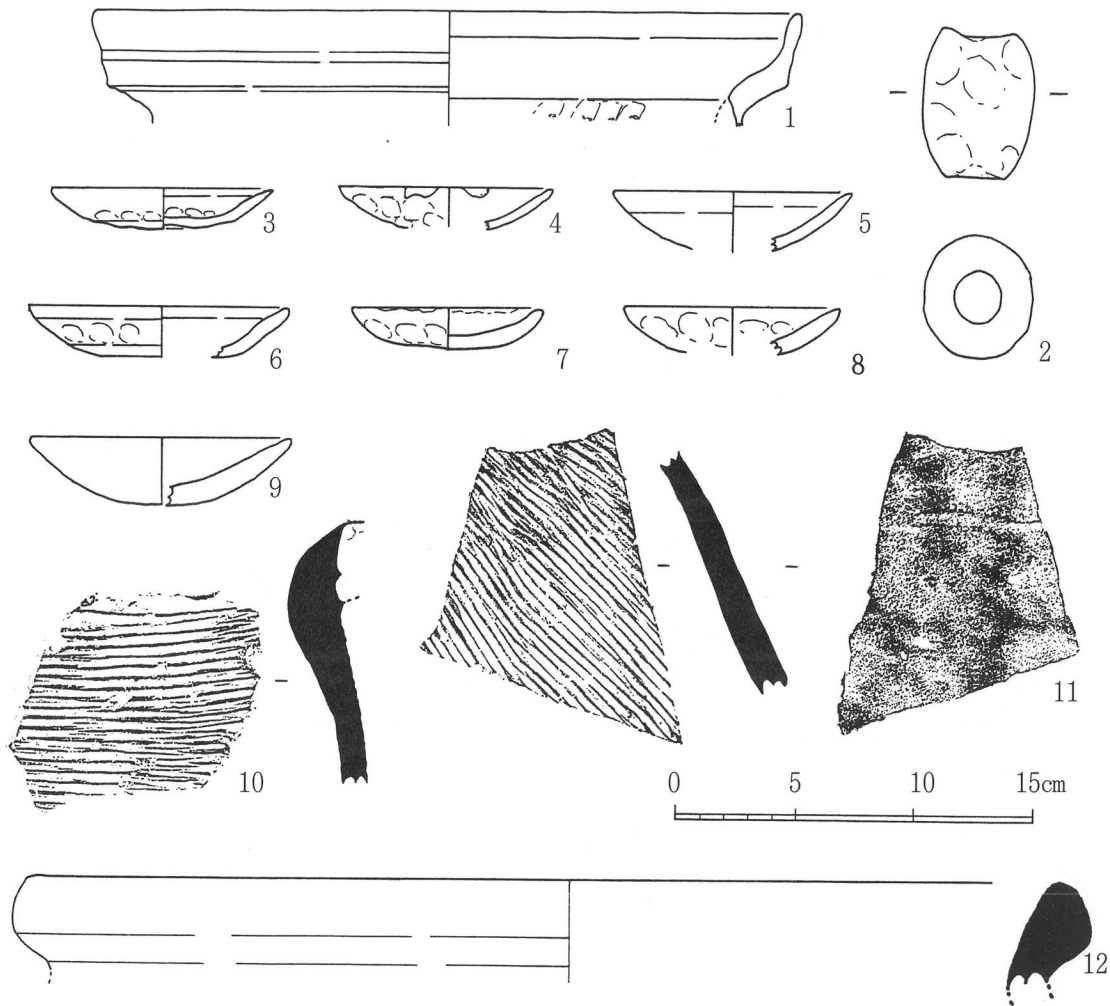
第9図 遺構の出土遺物①（1～8・16～22は $\frac{1}{2}$ 、9～15は $\frac{1}{2}$ ）



23・29はSD04  
 24～26、30～33はSD06  
 27はSD10  
 28はSD11

第10図 遺構の出土遺物② (23～28は $\frac{1}{3}$ 、29～33は $\frac{1}{4}$ )





第11図 包含層中の出土遺物 (1 / 3)

## Ⅳ まとめ

### (1) 遺構

今回の発掘調査では、中世～近世の溝18条、井戸1基、土坑、ピットを検出した。概況として遺構は調査区の北半部に良好に残っており、南側では後世の攪乱をうけている。

溝は、調査区の東壁に沿って検出したSD06のみが南北方向に向かっており、ほかは東西方向にのびている。溝の形状や所属時期などにより、およそ4つに類別できる。1つめは幅3～4mと幅広で深いSD06である。14世紀～17世紀前半まで長期間にわたり継続しており、集落内を区画している大溝と考えられる。2つめは幅2m前後のSD01とSD07で、14世紀後半～15世紀後半の時期である。3つめは幅3m、断面形が台形状を呈するSD04とSD10で、15世紀後半～17世紀前半の時期である。いずれもSD06に直交するような位置にあり、集落内をさらに分割している溝と推測される。SD01とSD07の間は70m、SD04とSD10の間は60m離れており、時期差による区割りの違いなのかもしれない。4つめはそれ以外のもので、幅が狭く、形状が明らかでない溝が多い。排水路的なものと考えられる。

井戸は、調査区の中央部で径2mのものを1基検出した。井戸枠などはなく、土層観察からも素掘りのものと判断される。越中瀬戸の筒形碗が出土しており、17世紀前半には廃絶されている。

土坑は、調査区北半部のSD01からSD04の間にまとまって分布している。遺物が伴うものが

わずかにあり、P 2 1では中世土師器の完形の皿が2点、P 3 7では越中瀬戸、土製品2点が出土した。またP 1 2、P 1 4、P 1 7、P 2 3からは銅銭が1枚ずつ出土しており、埋納的な意味合いをもつものかもしれない。

## (2) 遺物

出土遺物には、古墳、平安、鎌倉、室町、安土桃山、江戸時代のものがある。遺構からは珠洲焼、中世土師器、越中瀬戸の出土が多く、室町～江戸時代を主体としている。

古墳時代の遺物には複合口縁の甕がある。出土量はわずかで、前期初頭に相当する。

平安時代の遺物には須恵器、土師器、土錘がある。須恵器と土師器はいずれも小破片であり、新しい様相のものである。平成9年度の調査では、10世紀後半～11世紀の土師器の皿が遺跡から出土しており、おそらく当該期に属するものと思われる。

鎌倉、室町、安土桃山時代の遺物には珠洲焼、中世土師器、青磁、銅銭、木製品がある。珠洲焼はⅡ期の甕、Ⅳ～Ⅴ期の甕と片口鉢がある。中世土師器はすべて非ロクロ成形のものであり、P 2 1出土皿のように炭化物が良好に残るものもみられる。銅銭は4枚あり、いずれも輸入銭である。木製品は柄杓、曲物底板、桶の側板、板状のものがあり、欠損して廃棄されたものと考えられる。珠洲焼や中世土師器の様相から、時期的には14世紀～16世紀にわたっており、特に15世紀前半～16世紀後半が主体になるとと思われる。

江戸時代の遺物には越中瀬戸、瀬戸美濃、土製品がある。越中瀬戸には回転糸切底と削り出し高台の丸皿、筒形碗、播鉢があり、瀬戸美濃には鉢、瓶がある。17世紀前半に相当すると思われる。

このような遺物の様相から、遺跡の在り方をみたのが第12図である。4世紀初頭、10世紀後半～11世紀、13世紀前半とわずかにあり、14世紀以降から顕著になる。おそらく14世紀段階で集落が本格的に形成され、15～16世紀に最盛期を迎えた後、17世紀前半まで継続したものと捉えられる。

## 参 考 文 献

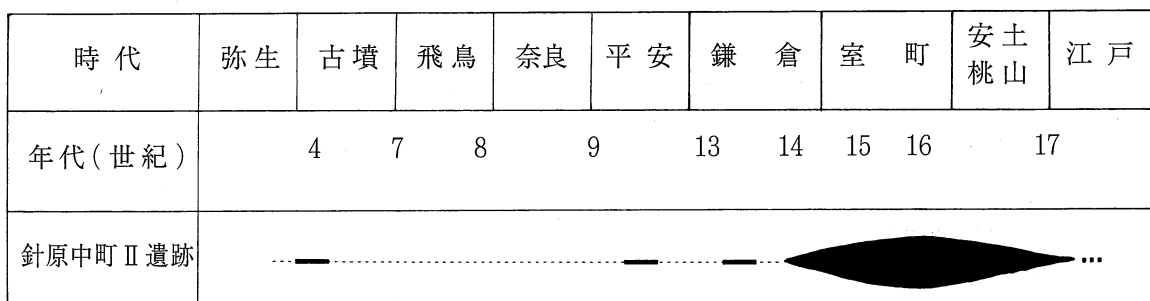
富山県文化振興財団 1996 『梅原胡摩堂遺跡発掘調査報告（遺物編）』

富山市教育委員会 1998 『富山市高島島浦遺跡 針原中町Ⅰ遺跡 針原中町Ⅱ遺跡』

永井久美男 1996 『日本出土銭総覧 1996年版』 兵庫埋蔵銭調査会

北陸中世土器研究会 1997 『中・近世の北陸－考古学が語る社会史－』 桂書房

吉岡康暢 1994 『中世須恵器の研究』 吉川弘文館



第12図 遺跡年代概念図



遺跡周辺の航空写真(1 : 10,000)

H10.8月撮影



調査区全景（東より）



調査区全景（北より）



S D 0 6 完掘状況（北より）



S D 0 6 出土遺物（北より）



SD01・SD02完掘状況（東より）



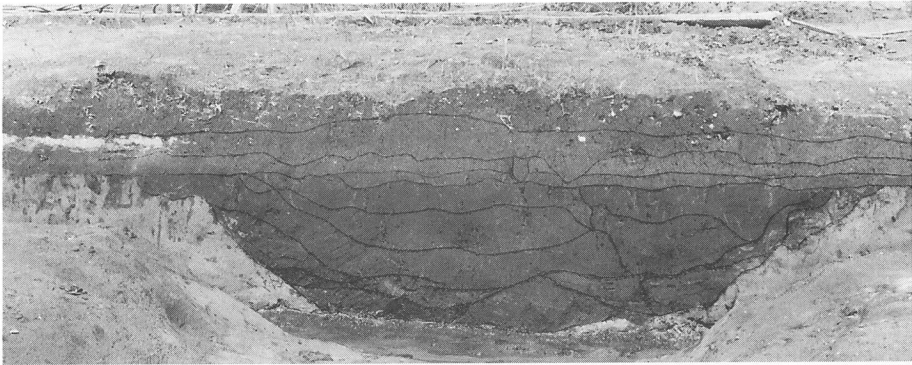
SD01 出土遺物（西より）



SD03 出土遺物（東より）



SD 11 出土遺物 (東より)



SD 07 土層 (東より)



SD 10 土層 (東より)

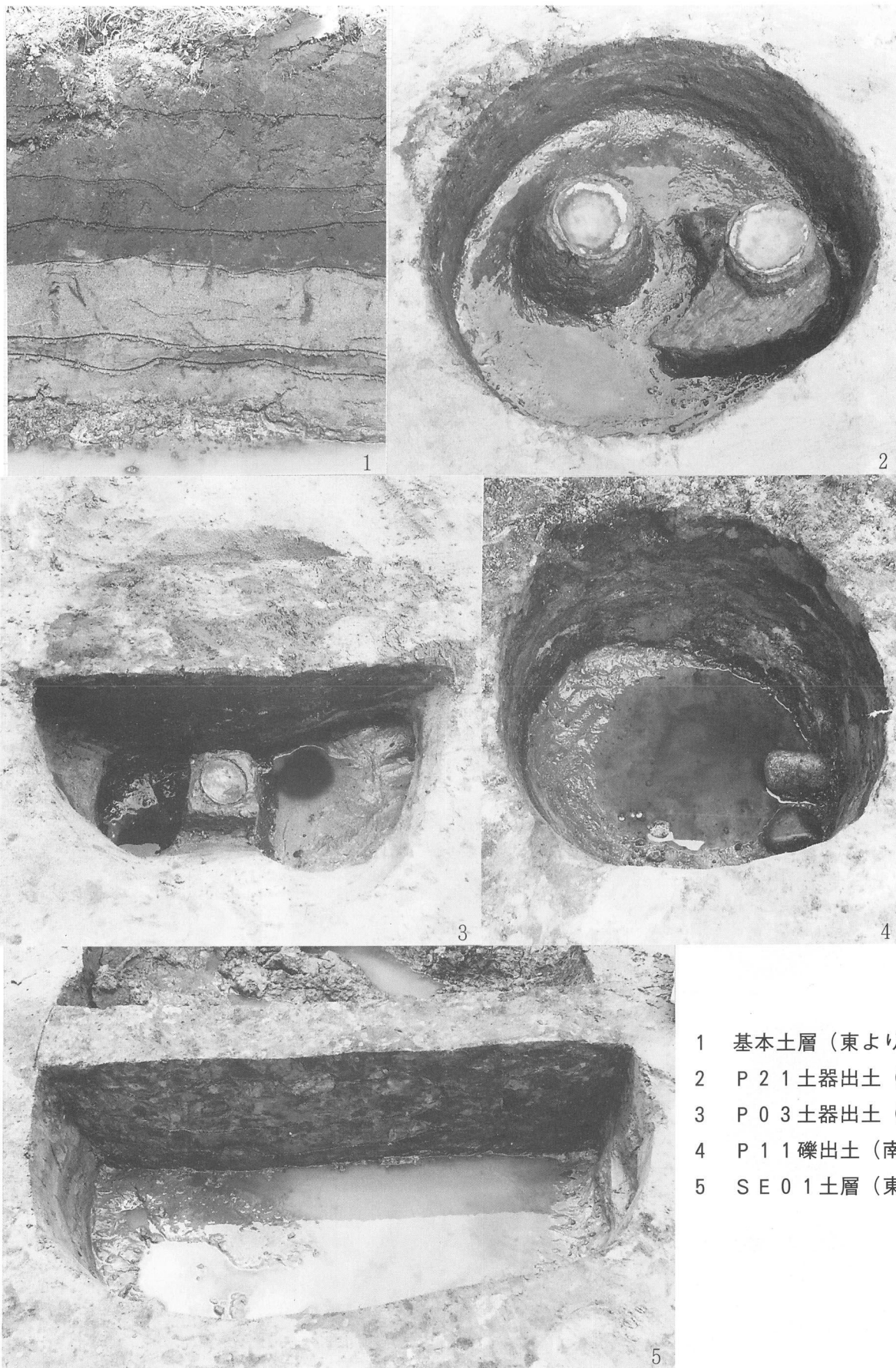


P 2 3 柄杓出土状況（北より）

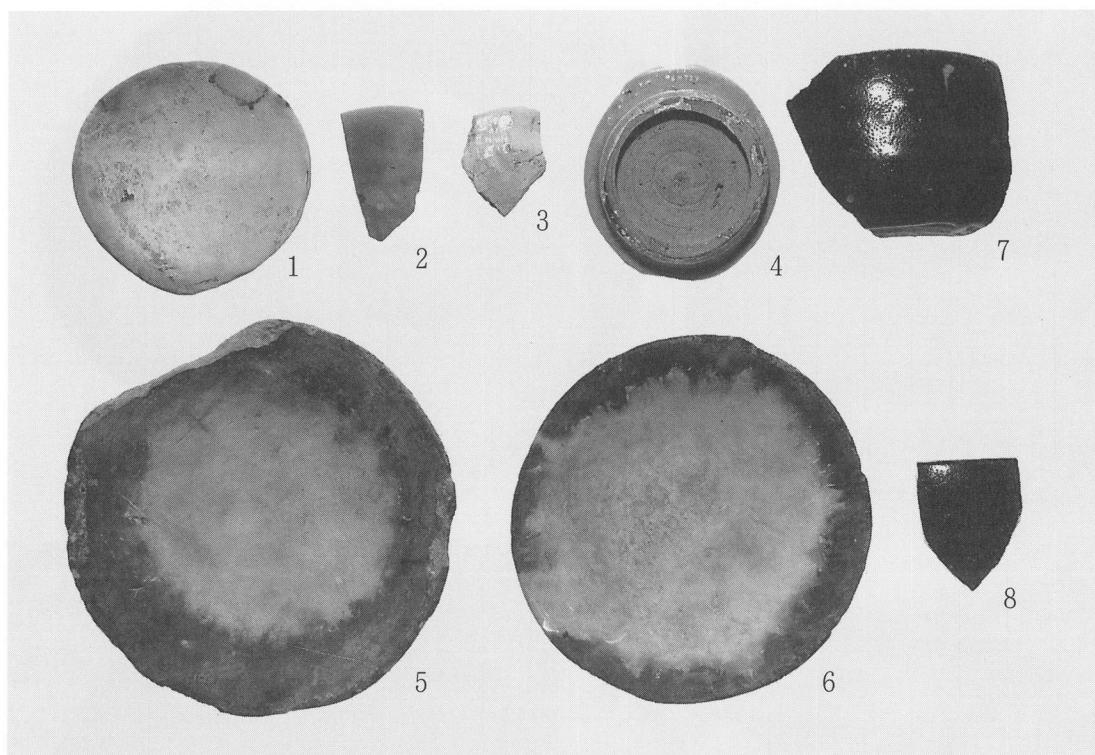


P 2 3 柄杓（北より）

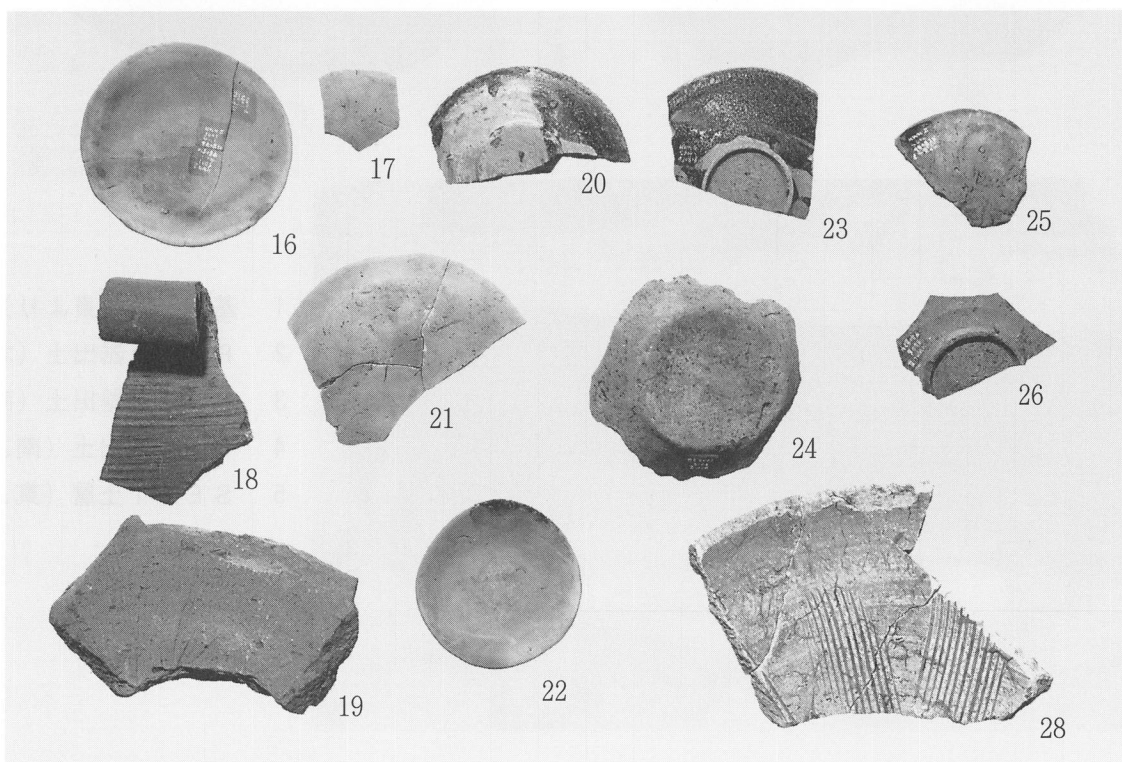




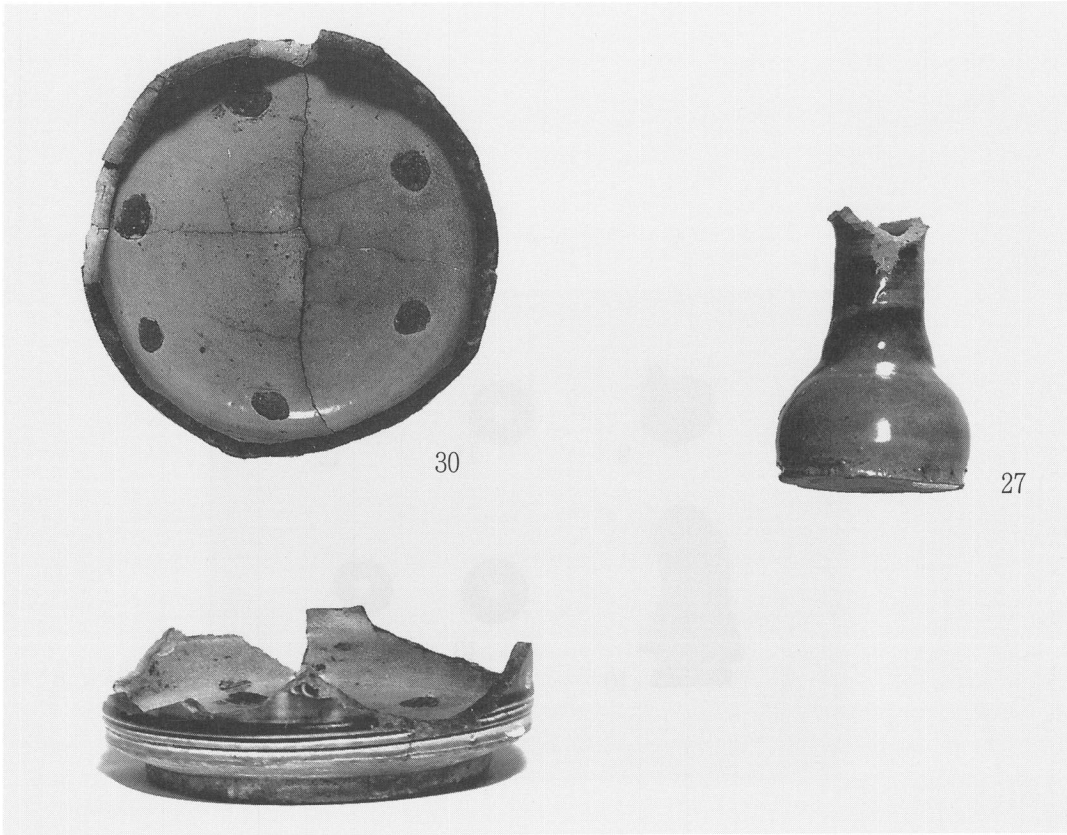
1 基本土層（東より）  
2 P 2 1 土器出土（北より）  
3 P 0 3 土器出土（南より）  
4 P 1 1 礫出土（南より）  
5 S E 0 1 土層（東より）



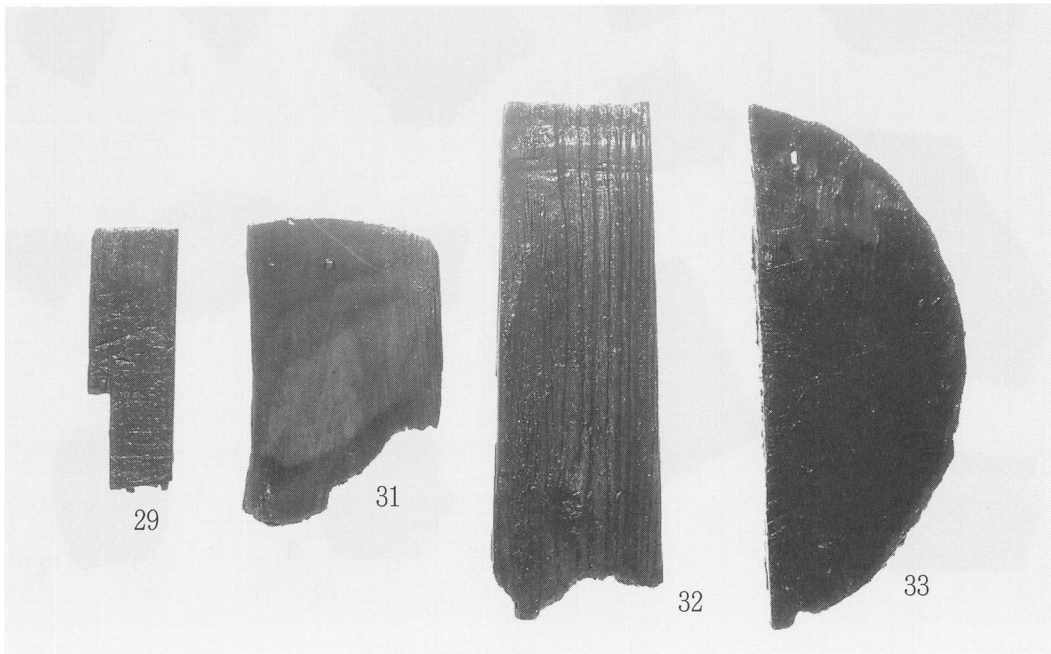
遺構の出土遺物 ( P . S E )



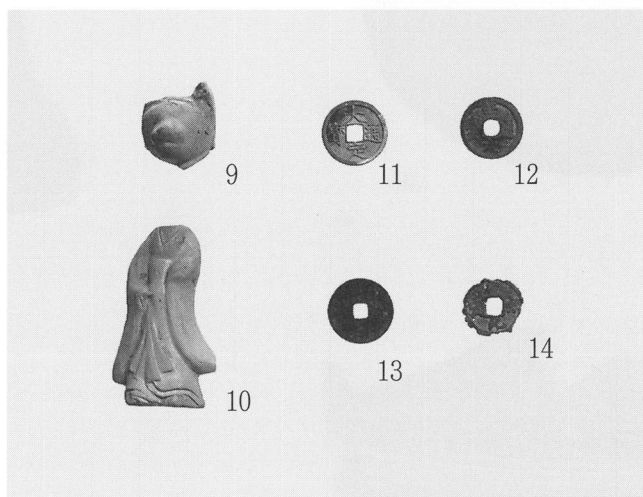
遺構の出土遺物 ( S D )



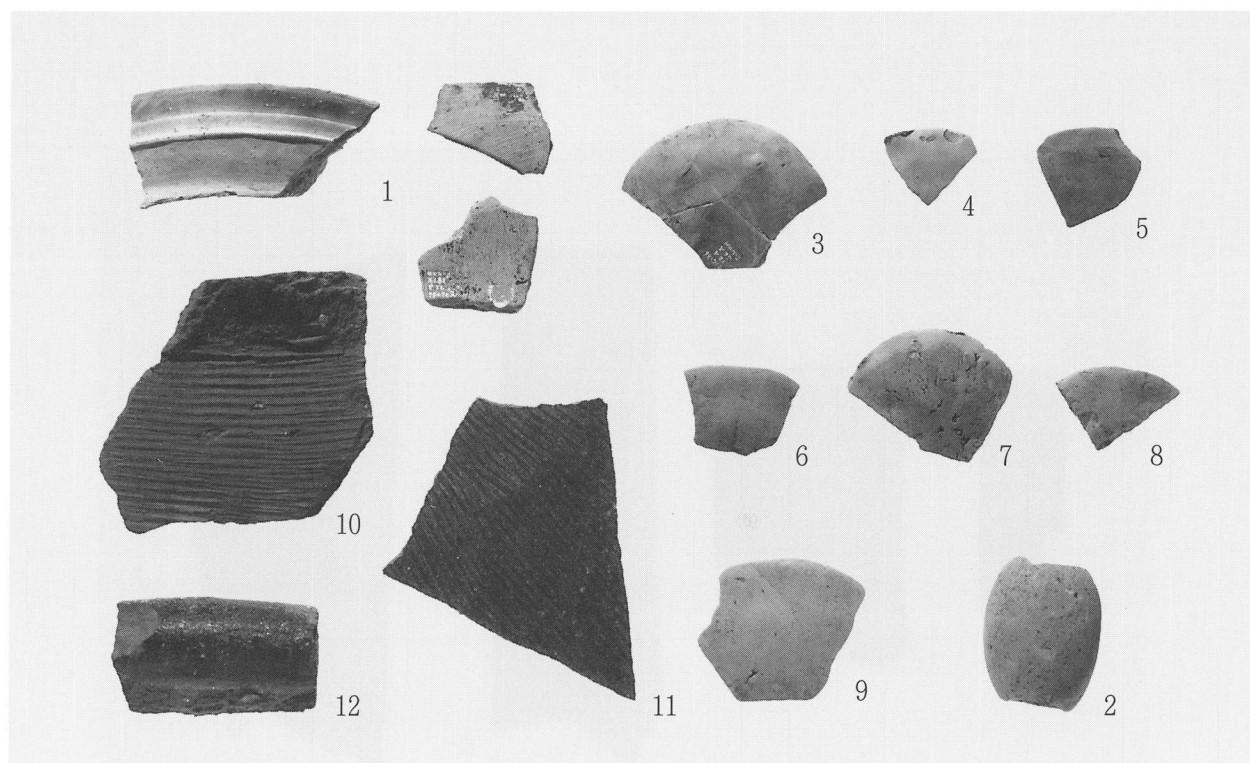
遺構の出土遺物 (S D)



木製品



土製品・銅銭



包含層中の出土遺物

# 報 告 書 抄 録

ふりがな	とやましほりわらなかまちにいせきはつくつちょうさがいよう							
書 名	富山市針原中町Ⅱ遺跡発掘調査概要							
編著者名	小林高範							
編集機関	富山市教育委員会 埋蔵文化財センター							
所在地	〒930-0803 富山県富山市下新本町5-12 TEL 076-442-4246							
発行年月日	西暦2000年3月24日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 ° ' "	東経 ° ' "	調査期間	調査面積 m <sup>2</sup>	調査原因
		市町村	遺跡番号					
ほりわらなかまちに 針原中町Ⅱ遺跡	とやまし ほりわらなかまち ぼぼまえ 富山市針原中町馬場前	16201	215	36度 44分 20秒	137度 16分 20秒	19980706 ～ 19980922	1,900	県営灌漑 排水事業
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物			特記事項	
針原中町Ⅱ遺跡	集落跡	古墳、平安、 中世、近世	井戸 溝 土坑	古式土師器、土師器、須恵器、 土錘、珠州焼、中世土師器、 銅銭、木製品、越中瀬戸、 瀬戸美濃、土製品				



調査参加者

県営新生産調整推進排水対策特別事業  
諏訪川地区に伴う埋蔵文化財発掘調査概要

**富山市針原中町Ⅱ遺跡  
発掘調査概要**

編集 富山市教育委員会 埋蔵文化財センター  
富山市下新本町5-12

発行 富山市教育委員会  
富山市新桜町7-38

発行日 2000年3月24日